

高等学校芸術科書道における鑑賞に関する基礎的研究

―山田寒山・山田正平の篆刻作品の鑑賞を通して―

神野 雄 二

一 はじめに

書道教育における鑑賞指導の在り方は、現今最も重要な課題の一つといえる。本研究は、高等学校芸術科書道における鑑賞に関する篆刻の鑑賞教材を提示しての考察である。

高等学校芸術科書道における領域に、表現と鑑賞がある。表現の能力とは、書道の幅広い活動を通して適切に自己を主体的に表現していく力量のことである。また、鑑賞の能力とは、日常生活における書や古典等における書の美を適切に感じ取る力量のことである。

『高等学校学習指導要領』『内容の取扱い』において、書道Ⅰでは「篆刻、刻字等を扱うよう配慮するものとする」とし、書道Ⅱでは「篆刻を扱うもの」としと明記されており、篆刻の重要性が窺われよう。

ここでは、山田寒山（一八五六―一九一八）¹⁾・山田正平（一八九九―一九六二）²⁾の篆刻鑑賞の教材を通して、その鑑賞指導の在り方を探るものである。

また、『高等学校学習指導要領』第二章 第七節 芸術 第二款 各科目「第一〇―一二」における「書道Ⅰ（書道Ⅲ）」の目標は、生涯学習を視野に入れつつ、書の伝統と文化に対する一層の理解を深めることを指摘している。そしてその目標を達成するために、これまで以上に鑑賞指導の在り方が問われることとなった。

山田寒山・山田正平の鑑賞に関しては「高芙蓉・山田寒山・山田正平『日本の遊印』、木耳社、一九八三年十月）の山田寒山・山田正平の事項を加筆・修正した³⁾。

二 山田寒山の篆刻による鑑賞教材

山田寒山の篆刻の鑑賞教材としてどのようなものが適切か。ここでは、五点取り上げ、釈文と鑑賞例により、鑑賞教材例として提示する。四において、同教材例を使用して、書道教育における鑑賞の在り方を考えるべく、アンケート調査を実施する。

① 寸心千古（図1）

・釈文

寸心、千古。文字は本来、空なり。

寒山の篆刻は昔からの正しい筆法を伝えており、その作品は他の人と違った独特の風格がある。寒山の心には千年、万年の昔からの作風をそのまま伝えていく。文字というものは本来、どんな芸術性でも盛りこめるものである。寒山の心には千年、万年の昔からの作風をそのままに伝えていく。

・鑑賞

天海禅師が山田寒山の篆刻を述べた偈に「鉄筆、宗旨を伝う。寒山、独歩の風あり」とある。この偈を要約してこの四字でまとめたものであると思われる。

この印は、山田寒山が新潟の坂口五峰（一八五九―一九二三、政治家・新潟新聞社長・『北越詩話』を著わす）のために刻した印である。側款に「辛丑秋日、寒山」とあり、寒山四十六歳の時の作であることがわかる。

山田寒山（一八五六―一九一八）は、名は潤子、号は寒山、名古屋の人。禅宗永平寺派の僧。十七、八歳頃、小曾根乾堂（一八二八―一八八五）を訪ね、篆刻について問う。二十四歳の時、福井端隠に入門して芙蓉派の篆刻を学ぶ。明治十六年三重県にある最明寺の住持となったが、明治十九年に辞して大阪に出る。後、明治二十八年に東京に移り、芝の瓢箪池の附近に住み、居を芝仙堂と名づけた。元来寒山は多芸多才で、詩・書・画・篆刻・陶芸すべてをよくした。画は墨竹が有名であり、詩は寒山詩の遺響ともいえるべきものであり、書は淡々とした中にも雅味があるものである。また荃廬、蔵六、蘭台、樁所と丁未印社を結成するとともに、富益齋の『印章備正』を刊行し、中村不折等と健筆会を催した。寒山はまことに行動的で幅広い活躍をした人

であった。

② 水清濯纓（図2）

・釈文

水清まば纓を濯う。

水が澄んだならば、それで私の冠の紐を洗う。

・鑑賞

これは『楚辞』の「漁父」にある言葉。この文は、屈原と老漁夫との対話形式をとっており、屈原の生き方を通して、人間本来の生き方を考えさせるものである。ここでは、老漁夫の「世の中の人みな濁ってみだれているのなら、あなたも泥をかき立てればよいではないか」という言葉に対して、屈原が次のように答える。「私はこういうことを聞いている。髪を洗いたての者は、必ず冠の塵を弾いてかぶり、湯浴みをしたばかりの者は、必ず衣の塵を振うものである。これは清潔な者は一層身をけがすまいと思うのが人の情である。どうして潔白な身を以て、よごれた物を受けることができよう。いっそ湘水の流れに身を投げて、江魚の腹に葬られても、どうして真白いわが身をもって世俗の塵埃をこうむることができようか」と。それを聞いて老漁夫が次のように歌うのである。「滄浪の水が澄んだならば、それで私の冠のひもを洗うことができよう。滄浪の水が濁ったならば、それで私の足を洗うことができるだろう」と。（星川清孝訳『楚辞』明治書院、二〇〇四年一月）

さて、この印は、伊藤博文の自用印である。明治三十三年に寒山が伊藤博文から印刻を依頼された、九顆の内の一顆である。印材は鶏血材である。寒山は明治四十三年頃、伊藤博文と初対面をしている。それは、博文の大磯にある滄浪閣が落成して詩会を開くという時のことであり、これを新聞で知った寒山が押しかけ対面したのである。その後、日本へ持ちさられたという蘇州寒山寺の夜半鐘を搜索したり、新梵鐘を鑄造する時に、博文に檀徒総代の任を托しており、鐘の銘文も撰してもらっている。伊藤博文と山田寒山との交流は多くの逸話を残した。

③ 那伽犀那（図3）

・釈文

那伽犀那。

一切の煩惱を破却しつくした十六人の尊者を「十六羅漢」と呼ぶ。その第十二番目に那伽犀那尊者がいる。羅漢とは、阿羅漢の略称であり、小乗教においては、最高の悟りを得た者のことをいう。

・鑑賞

山田寒山の印譜に『羅漢印譜』がある。これは山田正平の実父木村竹香の編したものであり『瓦礫放光』『金石結縁』の二冊からなっている。前者には、寒山が明治三十六年の天長節の日に島田亮斎作の十六羅漢陶像と布袋和尚・観世音菩薩・文殊菩薩に刻した印影をおさめている。後者は、それに因んで諸家の題字・詩・書・画・印などを集めたものである。この『羅漢印譜』は、山田寒山の傑作であるとともに、木村竹香と山田寒山という当時一流の文化人が、心あたたまる交わりをもった証として、永久に伝えられることになった。

さて、山田寒山は自分自身、芙蓉派をよくするものとして、高芙蓉以後五世として位置づけている。それは、高芙蓉―源惟良―小俣螭庵―福井端隱―山田寒山という一つの系譜である。寒山は呉昌碩の刻風を慕って明治三十年渡清している。その時、昌碩と親しく交わり、益を受けたようである。しかし寒山自身が明治四十年十月『東京日々新聞』の「百人一話」の中で「呉昌碩に入門し、昌碩の風を学んだが、芙蓉派を本領としている」と語っているように、寒山は芙蓉の血脈をしっかりと受けついで、芙蓉以後の代表的な印人といえる。

④ 釜中生塵（図4）

・釈文

釜中に塵を生ず。

かまの中には塵が積もっている。

・鑑賞

この印文は、貧乏な生活をいう言葉であり、寒山の生き方そのものをよく表している。彼は、どのように貧乏であっても、それを苦にすることなく、無位無官で生涯を通した。

この印は、寒山が日本新聞の募集に応じたものであり、寒山自身による自注と浜村蔵六の評語がある。その後、第一回から第七回まで当選した印一〇七顆を編集して『日本印叢』として出版されている。寒山の自注に次のようにいう。「貧乏なわが家には人は誰もいなく、ただ私一人である。夜中に読書するのを休んで一篇の詩を作る。二銭の肴と三銭の酒、独りで酒をくみ飲むのはわが家の家風。誰がこのことを知っていようか」と。

また、浜村蔵六がこの印を評して「あなたの清貧は天下に勇名であり、万里をとび歩くも得るものはなく、困窮してこの句を作ったのであろう。あなたは、文章も言葉も非常に巧みであり、詩・書・画・篆刻・陶鑄等すべて生まれつきの才能がある。能力は禅機をぬけており、智慧は人間とは思えないくらいである。確かに現代の奇人である。この印はそのしるしといえる」と述べている。

これは実に堂々とした、寒山の性情のよく現われた風格のある印である。高芙蓉の刻風をさらに強固にしたようであり、寒山の刻印の中の傑作の一つに数えてもいいものだろう。

⑤ 恭賀新年 (図5)

・釈文

恭賀新年。

新年をうやうやしく祝う。

・鑑賞

これは大和古印風の楷書の印である。山田寒山は多種類の書体を印に刻している。篆・隸・楷・行・草はもちろんのこと、仮名・梵字などもある。また、素材も鑄印、木印、陶印など多種にわたっている。寒山は風流を愛した君子人であり、多くの面白いエピソードを残した人である。次にその一つを挙げてみる。

寒山は戯れに趙孟頫の「八不刻」に倣って「三刻三不刻」というものを選

んだことがある。「三刻」とは、仁義のある者は刻す、品格のある者は刻す、信用のある者は刻す、「三不刻」とは、たくわえのない者は刻さない、酒のない者は刻さない、銭のない者は刻さないというものである。これなど寒山の朴訥としたユーモアある一面が窺える。徳富蘇峰は大正十三年十二月二十八日の国民新聞に「山田寒山翁を懐ふ」と題して一文を書いている。

「山田寒山は、明治大正の際に於ける奇人であった。雅にして雅ならず、俗にして俗ならず、僧の如く、仙の如く、商估の如く、山師の如く、文人墨客の如く、せんみつやの如く、殆ど傍人をして端倪する能はざらしめた」と。これは山田寒山という一人の人間をよくとらえている一文である。

三 山田正平の篆刻による鑑賞教材

山田正平の篆刻の鑑賞教材としてどのようなものが適切か。ここでは、十点取り上げ、鑑賞教材例として提示する。四において、同教材例を使用して、書道教育における鑑賞の在り方を考えるべく、アンケート調査を実施する。

⑥ 聊乗化以帰尽 (図6)

・釈文

聊か化に乗じて以て尽くるに帰す。

万物は変化にしたがって、最後には死にいたる。

・鑑賞

陶淵明の『帰去来の辞』の最後の一句である。「帰去来兮」で歌い出される全文三百四十字からなる『帰去来の辞』は、淵明の代表的な名文である。淵明はこの文を賦し官を辞して田園に帰り、酒と菊とを愛して一生をおくったのである。

山田正平（一八九九〜一九六二）は、一止、一止廬、幾盞と号し、一止は「正」字を二分したものである。若年には、邵平、更生、更生居などと号した。新潟市古町に木村竹香の二男として生まれた。正平は父竹香が印判業を営み篆刻に志していた関係で、十五歳頃から篆刻を始めている。この印は、正平十六歳の時に編まれた『梅檀二葉香印譜』所載のものである。この印譜の封面に、山田寒山が『梅檀二葉香印譜』と題しており、刊記に「大正三年

冬至三日題す。正平君印々」とある。これには、正平自用印のほか多くの姓名印、遊印が押印されており、中井敬所（一八三一〜一九〇九）の模刻なども含まれている。また、顧湘の刊行した『小石山房印譜』に所収の印も模刻しており、この印は配字は違うものの、その模刻の一つと思われる。『梅檀二葉香印譜』は、正平が篆刻を始めてまもない頃のものであるため、正平初期の印風を知る上で絶好の資料となるものである。父木村竹香が中井敬所、初代岡本椿所（一八六二〜一九一九）に篆刻を学んだため、正平の同印譜にある印は二人の影響によると思われるものが多い。また、篆刻はかなりの水準の高さを示しているもの、また難点もあり、正平模索の時代といえるものである。

⑦ 死為忠義鬼極天護皇基（図7）

・釈文

死しては忠義の鬼と為り、極天皇基を護らん。
もし、このまま死んでしまえば、忠義の鬼となって、天地の続く限り、皇室の礎をお護り申し上げる気持ちである。

・鑑賞

これは藤田彪（一八〇六〜一八五五、東湖と号す）が文天祥（一二三六〜一二八二、南宋末の忠臣）の正気歌に和して作った「文天祥の正気の歌に和す、並びに序」の最後の一句である。正平がこれを刻し印譜としたものが『正気印譜』である。これは、正平が名を世に示した最初の印譜であり、正平十八歳の時のことである。印は総数六七顆。方正平直なゆるぎのない勤儉なものである。これには滑川澹如（一八六八〜一九三六、篆刻家）の長い序文と寒山詩が付されており、それを版木に刻したのは正平自身である。この序文の中で澹如は、正平は自分に書を学んだと興味あることを述べている。

さて、正気印には、初代岡本椿所の風、つまり明末の何震を首とする篆刻の流派である徽派の趣きや、山田寒山の風、つまり芙蓉派の趣きが随所に見える。この印は日魯漁業の前身、提商会主人であった提清六が買とり、これが縁となり、後年、正平を中国へ遊学させてくれることになったのである。

正平の印譜には、生前に作られたものに『梅檀二葉香印譜』『正気印譜』『羅漢印譜』『八僊印譜』『正平陶磁印譜』などがあり、没後に、正平一周忌

の追善供養として作られた『一止廬印存』がある。

四

⑧ 随類得解（図8）

・釈文

類に随いて解を得。
法に随って理を悟る。

・鑑賞

この印は『羅漢印譜』に収められている。同印譜の印材は、浅草橋の藤山末吉（印材卸業を営む。昭和五十八年没す）が蔵していたものである。正平の養父山田寒山に羅漢印があるが、これは正平の羅漢印であり、これまで世に知られていなかったものである。これは、十六羅漢陶像に正平が印文を刻したものであり、漆塗の厨子に収められている。これには『羅漢印譜』が一冊収められており、その刊記に「大正丙寅四月八日、正平製」とある。つまり正平二十八歳の時刻された陶印であり『八僊陶印』（一九二七年刊行、正平二十九歳）とほぼ同時期のものである。羅漢印は、正平晩年のような格調高い風韻はないものの、豪放雄偉な力強さがある。

さて、正平は二十一歳と二十五歳の時二度中国に渡っている。この時、呉昌碩に画を、徐星州に篆刻を学んでいる。山田正平の印について語る時、正平の印は呉昌碩の影響を多分にうけていると述べる人がいるが、これは正平を理解する一面であると思う。正平には一個人の作家にのめり込んだ時期はなく、むしろそれを極力避け、多くの人と交わる中で正平芸術を創り上げていったものと思う。呉昌碩、徐星州にしても同じであり、正平の出会いの中で相当印象深い人であろうが、むしろ中国遊学は、多くの自然風物や文物に触れた事が、正平にとり益する所が大きかったのではないだろうか。この印は、正平が中国から帰って、まもない頃のものであり興味深いものである。

⑨ 頂門上一眼（図9）

・釈文

頂門の上の一眼。
頭のいただきにある一眼のこと。

・鑑賞

色界の天主である摩醯首羅天には三眼があり、その豎の一眼をいう。これは常眼を超えて物を見ることのできる眼である。

この印は正平が画家の小川芋銭（一八六八〜一九三八、画家）より依頼され刻したものであり、現在、茨城県牛久の小川家に蔵されているものである。山田家に正平が小川芋銭との交流を綴った「芋銭翁の想出」（草稿）が残されている。それによると、この印は昭和十一年・十二年頃、芋銭から依頼されたものであり、そのお礼として芋銭の画の代表作である「渴波童子」を贈られたことが述べられている。

正平と芋銭が初めて出会ったのは、大正九年頃のことであり、その後ずっと芋銭が亡くなる昭和十三年まで交流は続いている。正平は昭和六年に「寒山寺正平篆刻会」を催しているが、その時の推薦文を芋銭が書いている。正平は芋銭に私淑し多くの事を学んだが、中でも芋銭から聴聞した「何よりも自分の感興に真実であれ」「絵は七八分迄書道で行ける」とか、作者の態度について述べた「深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し」などは深く感じる所があったようである。

「芋銭翁の想い出」によると、芋銭の自用印の中に芋銭が自分で図案した印があることがわかる。これが、正平が芋銭を尊敬するようになるきっかけである。また正平は、芋銭と富岡鉄斎とを近代を代表する二大画家として位置づけている。小川芋銭は、正平にとりかけがえのない人であったといえる。

⑩ 天工人拙（図10）

・釈文

天に工にして、人に拙し。

聖人といわれる人は、天地自然に対して事をする場合には正当を得て巧みであるが、いざ人というものを相手とする場合は正当を欠いて下手である。

（遠藤哲夫訳『莊子』「雑篇」、明治書院、一九六七年三月）

・鑑賞

この印は、昭和二十四年に開かれた現代印人展に出品したものであり、正平五十一歳の時の作である。正平は自分で作成した履歴書の覚え書きに「河井荃廬と山田寒山に篆刻を学んだ」と述べている。正平が私淑した印人にこ

の二人を挙げたことは、それなりの理由があると思われる。山田寒山は、正平が篆刻を本格的に始めるきっかけを与えた人であり、後には、寒山の養子として寒山寺に入っている。河井荃廬は、正平を中国へつれてゆき呉昌碩にあわせた人である。この当代きつての二人の印人から正平は数知れぬ薫陶を受けたであろうと思われる。さて、保多孝三は「現代印人展評」において、山田正平と河井荃廬の印を比較して次のようにいっている。正平の印を理解する上において役立つと思われるので引用しておく。

支持する層の広範囲にわたる作家がある。支持層はそう広くなくても、支持の程度の非常に深いものを持つ作家がある。山田正平先生の如きは後者に属するものである。河井先生の高度の叡智から構成される作品は、理を以て追究すればある程度までこれを理解し得る普遍性を持っている。ところが山田先生は、とぎすました「理」というものよりもっと人間的な体臭を持つ。ここに先生の作品の人間的な神秘がある。前者はその合理性の故に万人がこれを認める。後者はその人間的な神秘性の故に見る人の半ばは之を疑い、半ばは之に陶醉する。

河井荃廬は、正平の印に対し、最初は正平の印は玄人離れして困る、と嘆いていたようであるが、最後には、相当の評価を与えていたようである。

⑪ 忘牝牡驪黄（図11）

・釈文

牝牡、驪黄を忘る。

これは、『列子』の「説符」にある、「牝牡驪黄」の故事による。「秦の穆公が伯楽の推薦により、九方臯を用いて馬を求めさせた所、黄色の牝馬を得たと知らせてきたので、人に馬をつれてこさせると、馬は黒色の牡馬であった。そこで、穆公が馬の色、牝牡さえ弁別できないものにどうして馬のよしあしが、見分けられようかといった所、伯楽が、これこそが九方臯のすぐれた点であるとして、馬を見分けるには、馬の天機（生氣や素質）を観るべきで、外面的なことに拘泥すべきではない」と述べたことによる。（小林信明著『列子』、明治書院、一九六七年五月）

・鑑賞

この印に対して、山田正平自身かなりの自信を持っていたらしい。「私が早い頃、日展に出した、『忘牝牡驪黄』の印、ひそかに意を得たものと思っていたが、別して世評にのぼらず、先生没後、新潟で山文（酒井議三郎）さんに逢って聞くに、当時非常にほめて居られ出典を示してながなが話された由、心下のおもいをしたのであった」（会津先生と篆刻）、求龍堂『渾齋秋艸道人』一九六八年十一月）この中に出てきた先生とは、会津八一のことである。

また、画家の中川一政もこの印は正平印の中で最もすぐれたものであるとして、特に「驪」の字の辺の温かさがいいといわれたらしい。これに対し西川寧氏は「むしろ私は冷たさを見ます。方寸の世界の厳粛さです」と述べている。（『山田正平遺作展』、『書品』第一五五号、東洋書道協会、一九六三年十一月）

正平の印の多くは、印篆体を基本としているが、この印は大篆体の趣きがあり、金文へと遡ぼる自由さを感じさせる。これは、正平五十三歳の時の印である。正平晩年には、このような印が多くみられる。「和して同ぜず」「遊雲魚」「谷神死せず」などがそうである。これは、正平が晩年に到達した一つの世界であると思う。

⑫ 俱会一処（図12）

・釈文

俱に一処に会す。

仏も衆生も共に浄土に生まれ会うという意味であり、『阿彌陀経』の一節である。

・鑑賞

この印には、「正平製、乙未六月」と側款があり、五十七歳の時の作である。寿山石、鳥鈕による。

さて、この印に関して正平自身一文を書いている。「開学祭に出品した俱会一処の朱文印、あれは四度目か出来た作である。最初は依頼者が取りに来し夜分、その人を側らに置いての作、少し硬い鶏血で、事、志と違った様であったが渡して支舞った。翌日思い直して別の石で試みた。朝の空気が爽

やかなせいか、前作には勝る物が獲られたので速達で送って置いた。その翌日か、学校で生徒を前にながながと講釈しながら、また同文を刻って見せたが効能書き程に葉はきかず、此頃の梅雨模様一般でいかにも鬱陶しい。帰宅してから聳心一番、さらに作ったのが即ちあれである」（『一点一画』山田正平先生篆刻講義ノート）（東京学芸大学書道科同窓会硯心会編、昭和三十八年六月）

正平の印には、いわゆる毛筆で書いた潤渇の表現に近いのがみられる。この印でみてみるならば、「俱」字と「会」字に、にじみの効果がみられ、また「一」字と「処」字にかすれの効果がみられる。これらは、印の表現範囲を広げ、変化を与えたものとして評価できるものと思う。また、印文と辺縁との関係は不離不即であり、絶妙である。

この「俱会一処」の印は正平の墓の墓碑銘として拡大模刻されている。ちなみに墓地は東京都の多摩霊園にある。

⑬ 養怡之福（図13）

・釈文

養怡の福。

身も心も安らかに養う。

・鑑賞

これは、魏の時代の曹操の詩「歩出夏門行」にある言葉である。これは、曹操の遠征の苦しみを歌ったもので、烏桓討伐の時の体験により作られたものである。曹操は、この詩の終章で、人間の寿命について歌い、人間の寿命は天の定めによるのではなく、身も心も養い努力していけば、不老長寿の道が得られるという。（『曹操』竹田晃著、評論社、一九七三年）この印は馬鈕の寿山石で、正平五十八歳の時の作である。

この印について殿村藍田氏は次のように述べている。「山田正平氏。輕妙洒脱、刀法自在、布字の自由自然、氣宇の雄大さ、総てに余裕を十二分に残したこの作は、視る者をして氏の篆刻の魔術に引入れるに十分である。芙蓉派を更に完成せしめたと思われるこの作は最も日本人らしい体臭を感じしめる誇るべき逸品であると信じる。…正平氏の作はこの筆力の散歩がもっとも大きく育って居るのだ、それは散歩即ちこれが生活に迄成って居る筆力の随

筆家、それが正平氏だ」(『篆刻めぐらへび』、『書品』第七二号、一九五六年九月)

藍田氏はこの作に最も日本人らしい体臭を感じると述べているが、これは正平自身、常に心がけていたようである。松下英磨が正平の言葉を「一止道人追懷」(『古酒』第八冊、新樹社、一九六二年十月)に載せている。「国は亡びても芸術は残るといふことを、このごろしみじみと感ずますね。然し書にしても、篆刻にしても、中国の亜流でしかない日本のものはどうでしょう。大死一番大いにやらなきゃ」

山田寒山は、自分自身を高芙蓉の正統を継ぐ者として位置づけているが、正平もまた寒山を経て、芙蓉の正統を継ぐ印人とみてよいと思われる。

⑭ 世短意常多(図14)

・釈文

世は短くして、意は常に多し。

人の生涯は短いのに、思うことはあまり多い。

陶淵明の「九日閒居」の詩にこの一句がある。これは、陶淵明が九月九日に菊の花を酒に浮かべて、酒を飲むという風習にちなんで、自分も酒を飲むとしたが、菊は庭一面に咲いているが、肝心の酒が手に入らない。そこで空しさのあまり、菊の花をたべながら胸中の思いを詩によんだものである。

・鑑賞

山田正平の印の特質の一つに均衡美があるが、これはそれを代表するものである。それまでの多くの印は均整で漢印の方正平直な美を追ったものが多かったが、正平は文字の筆画を一度壊して再構成をしている。つまり、筆画と筆画とを微妙にからませて、バランスをとった緊張感あるものである。これは正平独自のものであり、正平が画に志していたことと無関係ではないと思われる。同印は、正平五十九歳の時の作で、第一三回日展に出品している。

⑮ 無人華落(図15)

・釈文

人無く、華落つ。

回りには誰も人はいなく静かなたたずまいであり、ただ花が一つ落ちていくだけである、という実にもさびしい光景をうたった言葉である。

・鑑賞

この印は、昭和三十七年の一月に、日本美術院展に出品されている。同年の八月に正平は亡くなっており、正平最晩年の代表作であり、正平の絶作ともいえるものである。

さて、この印を刻したことに興味あるエピソードがある。それは正平の次女である山田梅枝氏が「買物三題―父の思い出・続」(『書品』第一四〇号、一九六三年五月)として触れている。

散歩にはよく骨董屋をのぞいていたらしいが、一昨年の暮頃だったろうか、西荻窪の方の店で欠け皿を見つけ、何様とか由緒ある家から出たという店の主人の説明に、書きつけてある「無人華落」という文句が気に入る、持ち合わせをばたいて買って来た。ボール箱に綿をしき、皿が平らになるようにならべて持ち帰った。幸いになくなったところもなく、うちわ形の皿に復原した。眺めていくうちに、骨董屋のうすぐらい店の奥の方では気がつかなかった「無名」という署名に、その驚きと喜びようは、はたで見ているのもおかしいくらいだった。この皿を朝となく夜となく、はたは寝床まで持ちこんでは眺めていたが「無人華落」という印を刻り、これが最後の展覧会出品となった。

「無人華落」の印文を見ると、正平は印面に何も塗らないで、まず朱で仮に布字をし、あたりをつけ、改めてその上に墨で布字をしたようである。すべて一筆で書かれており、実に生き生きとしたものである。一筆で書き、一刀で刻す。これは、正平の篆刻の根本姿勢であったのであろう。

四 高等学校芸術科書道「書道科教育法Ⅱ」受講生へのアンケート調査による実態調査

平成三〇年度における熊本大学書道受講者に対し、平成三十年十月、今後の書道教育鑑賞の在り方を考えるべく、アンケート調査を実施した。調査の目的は、現在書道を受講する学生の書道に関する意識の在り方、また教育の教科内容の開拓と教材開発という、より広い視点から、書道なかでも篆刻をどのように認識しているか、その実態の把握をめざすものである。

調査の対象者は、熊本大学に在籍する二・三・四年生「書道科教育法Ⅱ」受講者五名（A）～（E）である。調査場所は熊本大学書道教室、調査時間は三〇分である。

質問は、三の鑑賞教材例を提示し、大きく五項目に分けアンケートを課したので、それを基に、分析・考察する。

問いは次の通りである。

- ① 高等学校芸術科書道における鑑賞指導について、今日的課題は何だと考えるか、述べなさい。
- ② 高等学校芸術科書道における表現と鑑賞の関係について述べなさい。
- ③ 篆刻の鑑賞指導について、その課題と展望について述べなさい。
- ④ 配布資料の山田寒山の作品を一点取り上げて、鑑賞指導をする際において注意することについて述べなさい。
- ⑤ 配布資料の山田正平の作品を一点取り上げて、鑑賞指導する際において注意することについて述べなさい。

以下は、その回答である。

(A)

① 芸術科書道においては、それまでの中学校での書写教育と違って多くの古典や作品に触れ、また文化や歴史についても詳しく学ぶ。その中で美に対する感受性や自らの心の豊かさを養うにあたって、作品を鑑賞する力は非常に重要なものとなってくる。鑑賞指導については、この力を養

うために、生徒の興味関心に触れ、心を動かすような書を選択や、表現の活動と有機的につながりそうな生徒自身との照らし合わせができ、かつ交流し、見方が広がるような鑑賞の設定を工夫すべきだと考える。

② 表現と鑑賞は互いに高め合えるように指導していく必要がある。自分の感情や個性を自由に表現するにも、やはり鑑賞によって他者の作品の追体験を通して感情の豊かさが養われ、表現の幅の広がりに繋がると考えられるからである。また、自分が表現するからこそ、鑑賞時に気づくことがある。鑑賞でただ作品を受動的に見るのではなく、より豊かで深みのある自己表現の土台となるよう、学びの過程を作っていくべきだと考える。

③ 篆刻の鑑賞指導について大切にしたいことは、篆書体は漢字の五書体の中で最も古い書体であり、生徒にもあまりなじみのない書体であることから、その字形と変遷についてしっかり押さえることが大切である。「甲骨文・金文・小篆」では、同じ篆書でも時代や作品によって趣が大きく違う。篆刻（印）の歴史も資料とあわせて視覚的にその流れをとらえさせ、文化と伝統について理解を深めさせたい。また、実際に様々な篆書を使って印を刻ってみるといふ体験を通して、書体そのもののおもしろさ、筆で書く時との違い、文字文化について更なる理解へと繋がられると考える。

④ 図4 「釜中に塵を生ず」、この篆刻の鑑賞指導にあたり、重要視したいのは、寒山の生き方との繋がりがあがる。「釜中生塵」という言葉そのものが、各地を点々としながら無位無冠で貧しい生活を送ったとされる寒山の生活を表している。しかし同時に、その貧しさや孤独を苦にすることなく、寧ろそれを自ら高め、楽しみ、どこか崇高さを感じさせる。印の中に堂々と大きく刻された字や、線のどっしりとした太さ、丸みからはその力強さや重々しさ、堂々としたものが伝わる。貧しい生活といえ「苦しい」「ひもじい」「不安」「寒々しさ」「弱々しさ」などが生徒たちの中では連想されやすいと考えられるが、寒山のこの生き方は新鮮なものに映るだろう。その生き方や考え方の力強さを本作品の鑑賞から触れさせたい。

⑤ 図8「類に随いて解を得」、この篆刻の鑑賞指導にあたり、第一印象による把握、つまり生徒の直感的把握や直感的鑑賞を大切にしたい。本作品は線の太さや丸み、また字形のやわらかさに、目をひくものがある。どこかあたたかみを感じさせる本作品からは、他の作品と比べて生徒も親しみやすさを感じられるだろう。この点を活用して、初見での鑑賞、交流をさせることで、人の感じ方の違いや作品を見る面白さ、知りたいという探究心をかきたてたい。そこから、山田正平の遊学について、人や事物、自然との出会いなどを伝えることにより、更に作品を楽しませることができる。と考える。

(B)

① 私が高校生だったころ、鑑賞の経験をするために、文化祭で書道部が展示した作品を見るという課題があった。それまでの授業で学んだ書家の作品の臨書は見ていて面白かったが、知らない作品については鑑賞の観点に分らなかった。『学習指導要領』の「指導事項」にあるように、表現効果や作品や作者の背景を知ることによって、書を鑑賞することが楽しいと感じたり、書の美しさを味わったりすることができるようになるのだと考えられる。

② 表現と鑑賞は、両者ともに学ぶことによって、書を楽しんだり、探求したりする相乗効果をもたらすと考えている。臨書や創作などの表現を通して表現方法を学び、鑑賞する際に自分が学んだ表現効果を見つけると、作者との繋がりを感ずいて書が面白いと感じられるようになる。また、鑑賞によって得た感じ方を、臨書や創作に生かすことができるようになる。

③ 篆刻は、書体の美しさを感じられるものと考ええる。また、朱などをつけて印を捺すことによって作品として完成するため、作品が出来るまでの過程を想像することも、篆刻を鑑賞する際の楽しみ方の一つとして指導すべきだと考える。

④ 図1「寸心千古」、この篆刻は、字の一画一画が直線で、誰が見ても美しいと感じるものである。山田寒山が禅宗永平寺派の僧という経歴を知

ると、この真っすぐで伸びやかな線で表現されていることに納得させられる。

⑤ 図15「人無く、華落つ」、実に寂しい光景を詠う言葉を、生き生きと書くことによって、言葉に力を与えているように感じる。山田正平の「無人華落」のエピソードを生徒に伝え、感じ方を話し合わせることで、作品そのものの見方や感じ方が多様に得られると考える。

(C)

① 書道そのものが身近でない高校生にとって、書道の鑑賞は難しいとされている。生徒はそれぞれ、美的経験や能力によって「作品から何を感ずたのか」に気づいたり、それを表現する言葉が出てきたりするかしなないかは、差が生じる。また、書道の作品を見て「読めない、よく分からない」という感想が多く聞かれる。だから「文字」としてとらえて作品の意味を考えるのもよいが、まずは、「書」を「絵」として造形美や空間美に目を向けることを促すとよいと考えている。書を見る「なにか、よく分からないが、すごい」と感じるのであれば、なぜそう感じたのかを引き出すため、文字の大小、曲線、肥瘦や、強弱、潤濁、濃淡など、視点を増やすことで鑑賞眼が養われると考える。

② 表現と鑑賞には相互的につながりがある。例えば、鑑賞をして「この作品は力強いなあ、どうしてだろう？濃い墨でねっとりとした線質になっていて、丸みが少ない」と考えたならば、表現の際に「力強い書が書きたい」と思う時に、鑑賞で見つけたポイントを活かせる。また、臨書であれば、その作家の表現の疑似体験をすることとなり、その人の芸術観に触れることとなり、鑑賞でも役に立つ。どちらにおいても書道に関する美的経験として必要であり、大切なことであると考える。

③ 「篆刻」になじみがない生徒がほとんどだと思うので、まずは篆刻についてその歴史や内容を知ることが必要だと考える。朱文と白文でどのような印象が変わるのか、篆書や隸書、楷書やローマ字など、様々な文字や書体の印を見て、どんな印象を受けるかなどを感じさせたい。また、実

際に自分の名前を篆刻し、作品を友人同士で鑑賞し合うと、馴染みがなかった篆刻にも触れることができ「○○さんの名前を篆刻するところなのか、かっこいいな」などと、より身近に感じながら鑑賞をすることができると考える。

④ 図2 「水清まば櫻を濯う」、縦画や横画の間隔が均等になっており、清々しくも整然とした印象を受ける。また、その中でも、四つの文字の大きさが全て違っており、整然とした中にも自由さや面白さが感じられる点に生徒に気づいてほしい。

⑤ 図10 「天に工にして人に拙し」、画数が少ない上に朱文であることから、重々しさは感じられず、そうかといって軽い印象も感じられない。それは、おそらく、文字が随処に欠けていることで、墨で書いた時の濃い粘着質なかすれを想像させるからだと思う。字の形やかすれの面白さに生徒には気づいてほしい。

(D)

① 元々生徒たちは、篆刻に親しみが少ないので、より多くの篆刻を生徒たちに見せることが必要になってくると思う。それによる「鑑賞」の深まりにより、自分の感じたことを感じたままに刻することができるので、枠にはめずに自由に表現させたい。

② 表現と鑑賞は、深い繋がりがあると思う。「書に表す」ということ、つまり表現することは書道だけでなく、日常生活において様々な場面で行ってきている。字にはその時の自分の感情がよく表れるということ、生徒たちは身をもって実感しているだろう。そのことを踏まえた上で鑑賞を行うと、自ずと「これを書いた時の心情」などと照らし合わせながら鑑賞を行うことができる。

③ そもそも生徒たちにとって篆刻というものの自体が馴染みのないものなので、何故このような印が使用されたのかなど、印の歴史についてはじめに教えておくことが大切だと思う。また、たった数文字に込められた語

句の意味を考える面白さを生徒たちには知ってほしい。そのためには、歴史を概説して、背景を考えさせたりといった、指導の工夫が必要になってくる。

④ 図4 「釜中に塵を生ず」、この作品は、釜・中・塵・生と四文字から成るが、どれも高校生でも意味を想像しやすく、身近に感じる事ができる題材であるので、鑑賞用教材に適していると考えられる。生徒たちの想像力をかきたてやすい教材を選択することも、指導においては留意する点だと考える。

⑤ 図9 「頂門の上の一眼」、まず、一目見た時に「知ってる漢字がある」と分かる篆刻である。やはり、書に関心のない者にとって自分と何の関係もない字や読めない字があると興味を無くしてしまう。その点においてこの四文字は、刻まれ方も分かりやすく目をひきやすいので、鑑賞用教材に適していると言える。鑑賞における指導においては、このような最初期の導入にも注意していきたい。

(E)

① 高等学校における書道の鑑賞指導は、表現の授業と併用して行う必要があるのではないだろうか。鑑賞指導をまず初めに行い、書の美しさや書風、価値について学び、また書を創り上げた人物について、書に込めた思いを学習した上で「次は自分がやってみよう」「自分ならどう表現するか」という問いと共に表現活動に移ると、より目的意識のある授業を展開することができると思う。

② ①でも述べたことと同じように、相互に有効に作用する関係にしていくことが重要であると感じる。書の美しさ、楽しさは、まず名筆、名作を見ることから始まると思うからである。どちらかに偏るのではなく、同時にやることによって、書を見る目、それを再現する技術が身につく、自分なりの価値観、自分なりの表現へと発展させることができると言える。

③ 篆刻の鑑賞指導では、篆刻独自の点について注目させることが重要だと思われる。篆刻は、書とはまた異なり、刻字の立体的な表現方法、つまり工芸的要素を含んでいる。これらの点における美しさや面白さに着目した鑑賞を行うことで、書とは異なる美意識や価値観を発見することができると思う。そして文字の組み合わせについても考え、より広い視野で鑑賞できるように、段階的な指導を行うことも有効だと言える。

④ 図4 「釜中に塵を生ず」、この篆刻作品を指導する上で、書体や詩の意味、寒山の生活についてまず学習を行う。「なぜ寒山はこの書体を選んだのか」、「なぜこの詩にしたのか」という疑問を投げかけ、生徒の思いの考えを聴き出す。その後、資料等で寒山自身の生活、清貧な生き方について学習した後、さらに鑑賞を行う。私が注意する点は、作品の表現と作者を切り離すこと、そしてまた繋げていくことである。作品の背景を知ることにより、見方の変化を感じてもらい、その上でより強く感じる不動の美意識を見出すようにしたい。加えて「どうして印が所々欠けているのか」「なぜ文字を刻す『白文』としたのか」という細かい点にも注意を向けさせたい。

⑤ 図7 「死して忠義の鬼と為り、極天皇基を護らん」、この篆刻作品を取り上げる上で、刻した句の意味と正平の刻した年代について注意したい。まず、この篆刻は他の作品よりも字数が多く、十一字刻されている。この印に正平の込めた思い、文字が多くあることでどのような美意識や面白さが生まれるのかを鑑賞させていきたい。そして刻年代、山田正平十八歳の時の作品であり、彼のデビュー作であるという点に着目させたい。晩年の彼の作品等と比較し、どのような点が目立っているか、良さとしてどのような点が挙げられるかを問い、作品自体の特徴を発見させていきたい。

今回実施した学生への意識調査、実態把握は、さまざまな問題提起をしている。今回の考察で明らかになった点は次の通りである。この成果と展望をもって本章の結論としたい。

① 高等学校芸術科書道で、鑑賞に関する学習指導が求められている現状を踏まえ、教員養成の書道の授業において、鑑賞指導の重要性を実感させ

るとともに、その指導の在り方を考えさせる事が大切である。

② 高等学校芸術科書道において、表現と鑑賞が相互に有機的に関連していることを意識させる指導が大切であることを認識させる。

③ 篆刻を鑑賞することにより、篆刻を通じて書の伝統と文化を理解させることへと繋げていく事が重要である。

④ 生涯教育、生涯学習の観点から、社会の在り方を見据え、将来を見通した鑑賞教育が、家庭教育・学校教育・社会教育との連関の中でなされなければならない。

⑤ 国際化、高齢化、情報化などの社会の進展変化に対応した鑑賞教育のビジョンを踏まえた上で、書道教育における鑑賞指導の生涯学習体系の一環としてのビジョンを早急に作成しなければならない。

⑥ 生涯教育推進の視点に立った、書道鑑賞教育の具体的なモデルプランの提示がなされ、鑑賞活動の充実が図らなければならない。

五 おわりに

鑑賞教育の研究は、漸進してきてはいるものの、更なる実践研究の成果と蓄積が課題であろう。篆刻においても、鑑賞教材としてどのような内容のものを提示するかはその一つといえる。単に作品を鑑賞するだけでなく、その背景となる事跡や歴史なども考え合わせることが大切であろう。

篆刻に関する文字資料を取り上げることが大切であることは、書体理解、手書き文字文化の重要性を理解させる方法として最適であると言える。

それは、書道や篆刻の独自性等を考慮することに繋がり、書道教育の教材開発などの書の基礎研究になりうる。また書道教育に関する新たな資料・文献を発掘していくことにも繋がる。更に書道の文化の発展に寄与することも可能だろう。その意味からも、名所旧跡、地方の図書館、文書館、博物館などの文化施設は、今後更にその存在意義は高まっていく。

ここで高等学校芸術科書道における鑑賞教育の在り方を考えるための一つの提案を試みたい。教科書に、各都道府県の地域の郷土資料として篆刻や篆書の文字による「篆刻と篆書で見る郷土資料鑑賞マップ」として作成し、解説文を付す。熊本県でいえば、細川家歴代の書や印などは好ましいものと言えよう。

これからはこれまでの狭い鑑賞指導に囚われることなく、鑑賞指導の現状

の改善を期して、魅力に富んだ教材を創出する必要があるだろう。そして生涯にわたって文字文化を重視し、さらに文字文化を創造していくことが大切であろう。

書道の鑑賞教育の学習実践は、我が国の伝統的で豊かな言語文化を認識し、また文字文化を尊重し、親しんでいく態度を育成することが重要である。今まさに書道教育の一層の充実が求められており、特に次世代を担う青少年の育成は急務といえる。

今後篆刻を素材として、それを書道教育に有効に活かすための教材開発を行っていきたい。そして、他の作家の篆刻教材を用いた実践研究を進めてみたい。また、篆刻の更なる調査を進めるとともに、各時代・各地域の当該関係の文献・資料を集成し、組織的・体系的・学的に研究を深めることを課題とする。それは、篆刻の鑑賞を一例として、わが国の書道教育の特色、また書道の独自性等を考えることに繋がり、書道教育の教科内容の開拓と教材開発などの書の基礎研究になりうるものと考えらるからである。

本稿を執筆するにあたり、山田家には資料の閲覧の便を図って頂くとともに、懇切なご教示を賜った。ここに記して、衷心より感謝申し上げます。

【注】

- (1) 山田寒山については『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―』(熊日出版、二〇一七年三月)で詳細に論じた。
- (2) 山田正平については『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―』(熊日出版、二〇一七年三月)で詳細に論じた。
- (3) 筆者は、二〇一五年三月『書写書道教育論考』(創想舎)を刊行した。同著で鑑賞に関わる論文は次の通りである。
 - ・第一章 山田正平における教育者の側面―東京学芸大学における「篆書・篆刻」の講義を通して―
 - ・第六章「人間科学入門」における授業実践研究―書の人間学「現代書の歴史と鑑賞」―
 - ・第八章 高等学校芸術科書道における鑑賞指導に関する研究―学会活動を通じた授業実践―
 - ・第一〇章 高等学校芸術科書道における鑑賞に関する地域教材を使用しての実践的研究

- (4) 『日本の遊印』(高芙蓉・山田寒山・山田正平)、「日本篆刻小史」、木耳社、一九八三年十月)は、日本における代表的篆刻家を取り上げて、概述・鑑賞したものである。

【主要参考文献】

- ・文部科学省『高等学校学習指導要領解説』芸術編(教育出版、二〇〇九年十一月)
- ・『高等学校芸術科書道指導資料・鑑賞編』(文部省、一九八一年六月)
- ・『書写書道教育研究』創刊号(三)号、(全国大学書写書道教育学会、一九八七―二〇一七年三月)
- ・加藤達成監修『書写書道教育史資料』(東京法令出版株式会社、一九八四年)
- ・久米公著『書写書道教育要説』(蒼原書房、一九八九年一月)
- ・富田富貴雄著『史的観点に基づく書写教育の研究』(大学教育出版、一九九六年六月)
- ・海後宗臣等編『日本教科書大系・近代編 第二七卷(習字)』(講談社、一九七八年十二月)
- ・井上敏夫編『国語教育史資料』第二巻教科書史(東京法令出版株式会社、一九八一年四月)
- ・『国語科教育学研究の成果と展望』(全国大学国語教育学会編著、明治図書、二〇〇二年六月)
- ・『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』(全国大学国語教育学会編著、学芸図書、二〇一三年三月)
- ・『明解書写教育』(全国大学書写書道教育学会編、蒼原書房、二〇一七年四月)
- ・『美術館における古美術鑑賞の実践』(出光美術館、二〇〇六年三月)
- ・下田章平・齋木久美「高等学校芸術科書道における鑑賞指導とその展開」(茨城大学教育実践研究)第三二号、二〇一三年十一月)
- ・萱のり子「表現と鑑賞の架橋―書の実践を通しての鑑賞教育に関する考察―」(『美術科研究』二二二、大阪教育大学・美術教育講座・芸術講座、二〇〇五年)
- ・鈴木慶子・鶴谷和身・和田圭壮「書道の授業における鑑賞活動導入に関する

- る一試行―高等学校の「仮名」单元を中心に―」（『長崎大学教育学部紀要 教科教育学』三三、一九九九年六月）
- ・片山 智士・大森アユミ「書道教育における鑑賞指導の研究―自ら学び自ら考える力の育成を目指して―」（『福岡教育大学紀要』（50）、福岡教育大学、二〇〇一年）
- ・加藤泰弘「書教育の課題と展望―日本の書写・書道教育はどのような方向に向かうのか―」（『東アジア書教育論叢』第一号、東京学芸大学書道教育研究会、二〇一一年十二月）
- ・青山浩之「書写書道教育における今日的な課題―言語活動と書写―」（『書写書道教育研究』第三十号、全国大学書写書道教育学会、二〇一六年三月）
- ・田畑理恵「鑑賞教育における批評の意味についての一考察―美術教育と書道教育の批評の意味の比較を通して―」（『美術教育学研究』四八（1）、大学美術教育学会、二〇一六年）
- ・樋口咲子「高等学校芸術科書道における『和様の書およびその歴史』の授業構想―書論による鑑賞の深化を目指した授業展開例―」（『東アジア書教育論叢』第四号、東京学芸大学書道教育研究会、二〇一七年三月）

图1、图5 (山田寒山篆刻)
图6、图15 (山田正平篆刻)



图1 寸心千古



图2 水清濯纓



图3 那伽犀那



图4 釜中生塵

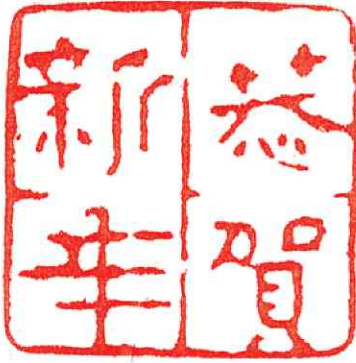


图5 恭賀新年



图6 聊乘化以歸盡



图7 死為忠義 鬼極天護 皇基



图8 隨類得解



図13 養怡之福



図9 頂門上一眼

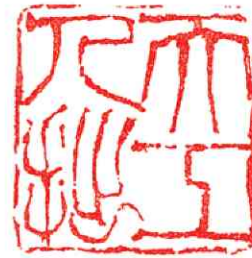


図10 天工人拙



図14 世短意常多



図11 忘牝牡驪黄



図15 無人華落



図12 俱会二処